

report on the marine algae of the United State North Pacific Exploring Expedition of 1853-1856. Pac. Nat. 1(5) : 3-40.

DRUEHL, L. and T. KANEKO, 1973. On *Laminaria saccharina* from Hokkaido. Bot. Mag. Tokyo. 86 : 323-326.

MIYABE, K. 1902. On the Laminariaceae of Hokkaido. J. Sapporo Agri. Coll. 1 : 1-50.

岡村金太郎 1936. 日本海藻誌. 内田老鶴圃, 東京。

(046 北海道余市郡余市町浜中238, 道立中央水産試験場)

## 新刊紹介

Cox, E. R. (ed) : **Phytoflagellates. Developments in Marine Biology. Volume 2.** ix+474 pp. Elsevier/North-Holland. New York, Amsterdam, Oxford. 邦価約 ¥16,400

編者の Cox 博士の序文によれば、1978年にジョージア大学で開催されたアメリカ藻類学会の Annual meeting において、“Phytoflagellates: Form and Function” というテーマのシンポジウムが開かれ、この会合がきっかけとなって本書作製の企画がすすめられたということである。すなわち、シンポジウムでは全ての鞭毛藻群を扱えなかったこと、時間に制約があり、十分な討議ができなかったこと、そしてなによりも、鞭毛藻類の研究は藻類学者と動物学者の双方によってすすめられているために、これらの生物群に関する研究論文はさまざまな研究誌に分散して掲載されており、一般に、研究の現状を十分に把握することが困難であるとの声が大きく、このような状況を打開するために、研究の現状と文献を豊富に盛り込んだ書物をつくることと決定されたという。そして、シンポジウムではカバーできなかった藻群を取り扱っている研究者を新たに執筆者として迎えたうえでつくられたのが本書である。

目次に目を通してみると、多様性に富んだ鞭毛藻あるいは微細藻群のほとんどすべてが網羅されていること、しかも各群の執筆者はいずれも現在第一線で活躍している研究者であることがわかる。編者が述べているように、確かにこれまで本書に類似した書物はなかったといえる。従来 of 書物の多くは鞭毛藻類に関する章を比較的簡単に概略的に扱う場合が多く、また各群を詳細にそりあげている書物、例えば Bourrelly の “Les algues d'eau douce”, あるいは Fott の “Algenkunde” などのすぐれた書物でも、急速に進展している研究の現状をフォローするには必ずしも十分ではなかった。これに対して、本書はそれぞれの藻群の研究者に豊富な情報を提供することができるだけの内容をもって、その点で出版の意義は大きいといえる。本書で取り上げられている藻群と著者をあげると以下のようである：単細胞緑藻 (C. A. Lembi), 氷雪藻 (R. W. Hoham), ブラシノ藻 (R. E. Norris), 群体性緑藻 (R. C. Starr), ミドリムシ藻 (P. L. Walne), 黄金色藻 (R. N. Pienaar), 黄緑藻 (D. J. Hibberd) ハプト藻 (D. J. Hibberd), 真正眼点藻 (D. J. Hibberd), 珪殻鞭毛藻 (S. D. Van Valkenburg), ラフィド藻 (P. Heywood), クリプト藻 (E. Gantt), 渦鞭毛藻 (K. Steinger and E. R. Cox)。

各章の内容は極めて具体的であり、それぞれの藻群についての研究の現状が紹介されている。執筆者の違いによって、各章それぞれに特徴があり、研究の現状を解説的に記しているものや、論文としての色彩のつよいものなどさまざまであるが、いずれにしても相当に専門的であり、多くの章は近年の電子顕微鏡を用いた形態学および細胞学的研究の成果や生化学的知見を詳細に紹介した総説となっており、またそれらに基いて分類や系統が論じられている。そのために、これからその藻群についての一般的な知識を得たいという、いわば初心者にとっては、この種の書物としては図や写真が少ないこともあって、かえって理解しにくい複雑な内容となっている。そのような場合には、例えば、H. C. Bold and M. J. Wynne (1978) の “Introduction to the algae”, (Prentice-Hall, New Jersey) や Van den Hoek (1978) “Algen” (Einführung in die Phykologie, Georg Thieme Verlag, Stuttgart) などのすぐれた教科書である程度の基礎知識を仕入れてから読めばよいように思われる。

本書はむしろ専門家向けのものだといえる。現在既に取り扱っている藻群に関する情報を整理された形で読みたいというむきには、あるいは、新刊の雑誌に掲載されている鞭毛藻に関する論文の論点の理解をたすけるための専門的な基礎知識を求めているむきには、これまでそのような要望に答へ得るものがなかつただけに、よい手引きとなるだろうと思われる。また、各章ごとにつけられている豊富な引用文献も有益なものである。さらに、

多くの章には、Needed Research という項目が末尾に設けられており、研究のこれから進むであろう方向についての示唆がなされていて参考になるだろう。

近年、電子顕微鏡による鞭毛藻の研究は著しく進展し、一般構造に加えて、細胞分裂などの動的な現象に関する微細構造の知識が蓄積されてきた。本書の最後の章では、それ以前の章において記述されているいろいろな藻群についてのこのような知見に基いて、鞭毛藻の祖先はどのような特徴をもっていたか、各藻群は互いにどのような関統にあるかといった興味ある問題について、鞭毛藻類の系統という題で、K. D. Stewart and K. Mattox による論が展開されている。このテーマは、鞭毛藻に限らず、大型の藻類や高等植物をも含めた系統という問題につながるものであり、現在、この章の筆者らを中心に活発な研究が展開されている分野でもあるので、進化・系統というようなテーマに関心のあるむきには一読の価値があると思われる。

最後に本の体裁について触れると、本書はタイプ印刷であるためか、一行抜けたり、一行余分だったりという編集校正上のミスが目立つ（例えば p. 15 の16-17行, p. 137 の15-16の間の行は行抜け, p. 137 の32行目は余分である）。第二版では訂正を期待したい。 (井上 勲)

- 賛助会員**
- 北海道栽培漁業振興公社 060 札幌市中央区北4西6 毎日札幌会館内  
 阿寒観光汽船株式会社 085-04 北海道阿寒郡阿寒町字阿寒湖畔  
 海藻資源開発株式会社 160 東京都新宿区新宿 1-29-8 財団法人公衆衛生ビル内  
 協和醗酵工業株式会社農水産開発室 100 東京都千代田区大手町 1-6-1 大手町ビル  
 全国海苔貝類漁業協同組合連合会 108 東京都港区高輪 2-16-5  
 K. K. 白寿保健科学研究所・原 昭 邦 173 東京都板橋区大山東町 32-17  
 有限会社 浜野顕微鏡 113 東京都文京区本郷 5-25-18  
 株式会社ヤクルト本社研究所 189 東京都国立市谷保 1769  
 山本海苔研究所 143 東京都大田区大森東 5-2-12  
 秋山 茂商店 150 東京都渋谷区神宮前 1-21-9  
 弘学出版株式会社 森田悦郎 214 川崎市多摩区生田 8580-61  
 永田克己 410-21 静岡県田方郡菰山町四日町 227-1  
 全漁連海苔海藻類養殖研究センター 440 豊橋市吉田町 69-6  
 神協産業株式会社 742-15 山口県熊毛郡田布施町波野 962-1  
 有限会社 シロク商会 260 千葉市春日 1-12-9-103